

---

---

## 日本緑化工学会の発足にあたって

会長 新 田 伸 三

---

---

日本緑化工学会は、平成元年5月から日本緑化工学会と改称し、学会として発足することになりました。

昭和30年代後半に始まるわが国経済の高度成長に伴い、国土の開発が各地で大規模に行なわれ、土木工事によるのり面の造成が目立つようになりました。わが国のように地形が急峻で、年間降雨量の多いところでは、のり面を放置すると、雨水による侵食が著しいことは改めて指摘するまでもありません。これに対して従来は、張芝や筋芝によってのり面を保護してきましたが、芝材料の不足に対処して、経済的で急速緑化の可能な播種による機械化施工が一般的となりました。また芝に代る各種の緑化資材が続々と考案され、わが国の緑化工は急速に発展し、その技術は諸外国に比べて決して引けを取らない水準になったと言えます。このことは大変喜ばしいことではありますが、こうなるまでに、特に初期の頃はまだまだ失敗も多く、試行錯誤の繰返しでした。そこでこれらの問題点を話合うため、植生によるのり面保護に携わる研究者が中心になって、昭和41年1月に日本法面緑化研究会ができました。

この研究会は、当初は少人数の沙龙的な集まりでありましたが、その後会員も増えてきましたので、緑化工に関する研究を一層促進し、技術の向上普及を図るため、昭和47年3月にこの研究会を改組し、日本緑化工研究会と称することになりました。この新しい研究会での主な事業として、緑化工技術検討会が毎年1回開催されましたが、近年は全国から200名をこえる参加者を見るようになりました。また昭和48年3月以降、機関誌として「緑化工技術」を発行し、昭和63年度に第14巻が出ています。このようにして昭和63年度現在で会員数は400名をこえ、緑化工の中心的研究団体として成長するに至りました。このような研究上の実績が認められ、昭和59年11月には日本学術会議に学術研究団体として登録することができたのであります。しかし全会員のうちに占める研究者の比率は、残念ながら漸増してはいますが、特に多いということではできません。これは緑化工が他の多くの既成の学問を基にして、応用技術として発達してきた年数が浅いため、緑化工専門の研究者が育っていないということで、今後は特に若い研究者を育成す

ることが何よりも急務であります。そのためには、われわれの研究集団が若い研究者にとって魅力があり、研究成果を発表する場としても権威があるという事実が示されねばなりません。

今まで「緑化工技術」誌は、緑化工に関する唯一の研究情報誌として、関係者の間で高い評価を得て来ましたが、今回学会に改組することにより、学術論文については他の学会同様に厳密な査読を行ない、学術的に正当な評価が得られるようにしたいと考えています。こうすれば研究者の業績として十分認められるものとなるわけです。やがてわれわれの緑化工学会誌にも優れた学術論文の積極的な投稿が十分期待できると考えています。

もちろん学会誌といっても難しい論文ばかり掲載されるわけではありません。広い視野に立った総説、分かり易い技術解説、現場からの調査報告や緑化事例の紹介など、一般の技術者にとって興味があり、活用しうる記事も大切にしたいと思います。

ところで緑化に関する研究分野は、のり面緑化から、都市、国土、グローバルな砂漠の緑化まで広い範囲にまたがっています。また内容的には優れた自然の代表としての緑の保全、緑化による生活環境の保全や景観の保全といった人々の生活と深くかかわる問題が、現在大きくクローズアップされています。このように研究の領域が拡大してくると、もはや個人的な研究よりも、多くの分野の専門家が集まってグループ研究を行なう必要性が高まってきます。そこで今度の緑化工学会ではその組織として、ルーチンワークとしての事業部門の外に研究部門を設けて、社会の多様なニーズに対応した研究成果を挙げるために、各種の研究部会を常置することにしました。この体制はいささかユニークな試みであると言えます。さし当り斜面緑化研究部会、都市緑化技術研究部会、環境林研究部会、生態系保全研究部会、乾燥地緑化研究部会を置くことにしていますが、このような研究部会での活動を推進することによって、おのずから社会に対する学会の役割が明らかとなり、緑化業界の発展にも役立つものと考えています。もちろんこのような研究部会は、決して固定的なものではなく、社会のニーズに応じて順次改変していくべきものであることは言うまでもありま